



聖護院僧侶らと新宮山彦ぐる一ふ会員、参列者＝17日、行仙宿山小屋

# 聖護院門主が修復開眼供養

ボランティア団体「新宮山彦ぐる一ふ」(川島功世話人代表)が管理する奈良県下北山村にある山小屋「行仙宿」の行者堂の仏像「役行者尊像」の修復が済み、安置された行者堂で17日、京都市左京区の本山修験総本山・聖護院の宮

城泰年門主と同院5人の山伏が仏像の修復開眼供養を行った。同会員と関係者ら約50人は喜びを分かち合い、護摩だきで家内安全などを祈った。修験道の開祖といわれる「役小角(えんのおづぬ)」の仏像で、行者堂の新築時、本

## 大峯奥駈道の行仙宿で 新宮市



一人ずつ護摩木を火に入れる

尊として平成2年に聖護院から譲り受けた。この仏像の中から、作られた当時に書かれた「願文文書」が見つかった。標高約1000mの気温や湿度の厳しい環境下で傷みがひどくなったため、昨年7月に性根抜き供養を行った後、奈良市秋篠仏所の浅村朋伊仏師(41)に修復を依頼した。文書は浅村さんが修復作業中に仏像を解体した際、見つけたという。内容を調べた宮城門主によると、仏像は元禄15(1702)年に天下泰平や国土安全などを願い、理正院の轉銅行家によって作られたもので、後西天皇第7皇子・聖護院第37代門主の道尊親王が開眼供養を行った由緒ある仏像だという。文書の原本は、聖護院資料室に保管する。同グループ結成当時の世話

人代表・玉岡齋明さん(93)は、大勢の参加を喜び「仏像はこれからも大切に祭り続けていく。きつと功德をいただけると思うので、こくおいでの時にはぜひお参りを」と呼び掛けた。供養を終えた宮城門主は「行仙宿までの険しい道が、どこもきれいに掃き清められていた。奉仕の精神に立ちあふれた皆さんの気持ちを大変ありがたく思った」と感謝した。

新宮市で昭和49年に結成された同ぐる一ふは、明治維新後の神仏分離・修験道廃止令により、放置され荒廃していた南奥駈道を刈り開き、路面を再生。休憩や避難所となる山小屋の新築や改築、整備を行った。ほぼ毎週、南奥駈道と山小屋の点検、清掃、周辺の植生保護にも取り組んでいる。(泉 真子)